◆教化研究Ⅰ◆

教化研究会議——十年目の歩みと教化目標

新間智照

日蓮宗教化研究会議は本年で第十回を迎える。十年一昔というが、教研会議が宗門の中で定着し、地域教研は十宗務区に拡がろうとし、遠忌をめざす宗門の推進力の一つに数えられるようになったその歩みは、正当に評価されてよいであろう。

教研会議の発端

「伝道宗門への体質改善」をめざす「護法運動」が、地方で実動に入った（護法大会などが開かれ出す）昭和四十三年、日蓮宗現代宗教研究所（現宗研）は「布教伝道教化の問題点を探り、現代の伝道のありかたを求める研究と交流が必要ではないか」との見地から、「教化研究会議」を提案・主催し、全国に呼びかけて、ここに手さぐりの中に宗務院で第一回教研会議が開かれたのである。

内容は総花的な提示ではあったが、その後教研活動でとりあげられ追求される多くのテーマや部門を含み、現代の宗門の伝道教化の問題点が浮き彫りにされたのであった。

全国より参加した現場の教師にとって、この会議は心に清新な希望の灯をともした。終了後、熱意のこもった感想が寄せられる。筆者の言葉でいえば「それは、酸素の欠乏した室に窓が開かれ、清新な空気が流れこんで来たような感動であった」。

下からもりあがる教研へ

この時点で現宗研は適切な方策をとった。宗務院および東京近辺の一部の人々によってのみ、この教研会議を継

続運営してゆくのでなく、熱意ある感想と批評を寄せた参加者有志と、全国に散在する活動的布教師を教研運営委員に委嘱し、現場の教師の声を反映し、下からのもりあがる力で、第二回以下の教研会議を開催したのであった。

思えば宗門には、所長会議・三会長会議をはじめ、役職ある人に行政事務レベルで交流する会議はあったが、「一人の日蓮宗教師」として、布教教化そのものを論じあう集会はなかったのである。

あるいは、中央講習会のように、専門家やベテランの講義を一方通行で受講研修する機会はあっても、教師おたがいが布教の本質・布教の方策と反省を語り合い討議しあう集会はなかったのであった。

教研会議は、その盲点を見事についた。教研の魅力は、教化を考える教師が肩書ぬきでだれでも参加発言できることと、自分の思っていることを自由に語れて他の地区の教師と交流できる点である。

地域教研はじまる

それから二年後の昭和四十五年には、秋田ではじめての地域教研——第一回東北教研会議が開かれた。東北農村の生活と特色ある信仰習慣をふまえた、地域の実情に根ざしたその地域の教師の教化研究である。

さらに翌年、古くから文化が開け、都市と農村が近接した近畿地区で、第一回近畿教研が開かれるや、地域教研は中央教研と相補う重要な意義を明らかにし出したようである。

①地理的時間的に、中央教研の十倍の教師が参加できる。

②地域の実情をふまえ、足が地についた論議ができる。

③大きな方向を見誤らないよう、中央教研と交流できる。

ときあたかも宗祖降誕七五〇年であった。

中央・東北・近畿の併催期

こうして数年、三つの教研は回数を重ねてゆく。中央教研では「都市化に対応する伝道」「青少年教化」「文書伝道」「公害問題への対処」など多くのテーマが継続的にとりあげられ、東北教研は回数が伸びなやんだが、近畿教研は地理的まとまりのよい利点もあって、開催地を十二管区持ち廻りにしながら、すっかり定着し、護法統一信行を綿密に検討したり、「教化センター」構想をうち出し、教化交流のためのセンター網を設置するなど、教研のモデル地域となったのである。

十宗務区で教研会議を

七百遠忌が近づいてくる昭和五十年は、教研会議の飛躍

の年であった。つぎにのべる「教化の友」の創刊とともに地域教研も拡がりはじめる。

まず中央では「報恩」が主テーマに取り上げられ、「宗祖への真の報恩とは」「宗祖の報恩観をどのように信徒や社会に教化してゆくか」が真剣に考えられはじめた。近畿でもこれに呼応し、「報恩法話集」などの資料作成に進み、中央教研と地域教研との資料の共同化を試みたりして、教研の密度が高くなって来たのである。

そして、すべての宗務区ですべて教研会議を開催しようの声が高まり、幾つかの地域で準備がはじめられた。関東教研・中部教研・京浜教研と実現してゆき、五十一年には中四国教研・山静教研となり、残る北陸・九州・北海道も五十二～三年のうちに開催されることになろう。そしてほとんどが、毎年開催への方向をとっている。

小さなハプニングもあった。教研そのもののスケジュールでも予算でもなく、開催地元寺院の歓待が過ぎたのを、その教研そのものが不まじめであるかのように喧伝された一件もあったが、オブザーバーとしてその会議に列席した筆者として、その宗務区の名誉のためにも、誤解であることを表明しておきたい。

各宗務区で教研が開かれることによって、いまや一千名の教師が教研に集まり、真剣に布教伝道教化について語りあう体験を持つ時期が来ているのである。

「教化の友」に結ぶ交流

年に一度の教研会議のみでなく、常時おたがいに教化資料や体験を交流しよう、そのための機関誌を出そう、との願いが実現したのも昭和五十年である。A5判、二十～三十頁程度のささやかなものであるが、教研会議がこれを産み出したのである。教団の行政機構が刊行しているのでもなく、一地方の同人誌でもなく、全国の数百名の「自分たちの手で自分たちの本を出そう」という自発の意志に支えられて、好評のうちに年六冊の刊行がつづけられている。

本局事務所の他に東北・関東・西日本と三支局が設けられ、発送と集金が行われているのも、センターづくりの積極的な現れである。

教化センターづくりへ

宗教教団であるからには、単位組織としての各寺院が一つ一つ教化のセンター的な存在であるべきは論をまたないが、宗門全体として教化活動を進めるうえで、おのずから地区・管区・宗務区等に、教化に関する資料を蓄積保存し、求めに応じて情報を提供し、中央と末端寺院とのパイプになる情報交流センターが必要である。もちろん、それが発展して、立派な設備と専従員をもつ本格的なセンターにまで成長すれば申し分ない。

教研会議の中で五・六年前より、このセンター構想は生まれ、検討されつづけて来た。現宗研をふくむ宗務院は、その中央センターとしての役割をもつのではあるが、それほど強力ではない。この中央の機能を強化することは大切なのであるが、同時に、本宗は新宗教々団などと異って、中央に集権し中央を強大にすることが難しい体質がある。

それを補うために地域の教化交流センターがたいへん重要である。管区ごとに、これも宗務所がセンターであるべきではあるが、現実には行政事務で手いっぱいというのが各地の宗務所の実情であろう。そこで場所ならびに責任者としては、宗務所でもよいし他でもよい、要は実際に機能するところに管区センターを設ける。さらに宗務区内に一ケ所センターを設けて、地域教研の運営や、中央と管区との中間連絡、あるいは中央では遠すぎる、管区では小さすぎる、という宗務区のほどよい位置を利用して、教化資料の作成配布その他に活動するのが望ましい。

モデルケースとして近畿宗務区内では、教研参加者の合意により、この教化交流センター網を設置し、少しずつ活動化している。近畿センターは筆者の自坊の事務所に専用のデスクを置き、非常勤の書記を委嘱（有給）するところまでこぎつけている。資料の具備はもとより、視聴覚機器や印刷機械等、各寺に備えられないものをセンターに設けるなどの運用が考えられる。教研十年の歩みは、その実現の方向に向っているようである。

教化の目標

このような十年の教化研究の積み重ねの中に、何を教化すべきか、おのずからその目標が見定められて来た。

①報恩の教化

宗祖の説かれた報恩の教えを伝え、その宗祖の恩に報ずるためにどう生きるべきかを教える。

②祖書を学び信行を深める（信・行・学）

人を教化するには自らも学ばねばならない。相手もともに学ばしめねばならない。宗祖の教えを正しく信解するために、能化所化ともども、祖書をさらに学習し、唱題中心の信行を深める。

③現代人の苦しみを除く（立正平和）

もとより本化の信に入らしめ唱題生活に入らせることが、苦を除く根本手段であるが、現代に表れた衆生苦の種々相に同苦し、反戦・反公害・反差別等の立正平和の行動の中に、唱題成仏と仏国土荘厳の菩薩行を教化してゆく。

④次代に伝えてゆく（青少年教化）

青少年の教化にとくに心をくだき、宗祖の教えを次代に伝えてゆかねばならない。青少年期は感化を受けやすく、この時期に受けた影響は一生を支配さえする。二十年後・三十年後の宗門をつねに考慮しつつ、現在の教化内容を考

えねばならない。

以上のようにふり返ってみると、最初はごく一部の有志が手がけはじめた教化研究が、「もの好き人種のあつまり」程度に見られていたが、十年にわたる積み重ねの中に、参加者の裾野を広げ、宗門体制に欠けていた盲点を補い、いまでは七百遠忌をめざす宗門の伝道教化態勢を動かしてゆく原動力にまで成長したと言っても、過言ではないと思う。

道はひとすじ七百遠忌――である。